

学位論文の要約

中近世における港湾と都市の空間構造研究

三好 志尚

本研究は中近世に発達した港湾都市の空間構造について、歴史地理学的観点から接近するものである。全6章をもって構成し、概要は次の通りである。

第1章では、中近世の港湾都市に関する研究史を整理した。港湾都市は都市史研究や流通経済史研究などで多くの議論が蓄積されており、その空間構造について本章では次の2点の問題を指摘した。第1に、港湾都市の都市空間に着目した研究は、政治権力による支配体制や都市社会構造の解明、町並の形態的特徴の描出などを目的としており、都市空間において港湾を空間的に位置づけられていないという点である。第2には、中近世の流通経済の展開プロセスと都市空間の変化の関係が看過されていることである。流通経済史研究により港湾都市では流通経済の変化に伴って市場構造における機能の変化や都市商業の変化などがあったことが指摘されてきたが、流通経済の変化に関連した都市空間の変化のプロセスは示されてこなかった。

他方で前近代の港湾施設についての研究では、諸港湾施設は中世には自然地形に左右されて立地したが、近世には開発を伴って人工的に配置されたことが示され、港湾における諸機能のゾーニングが成立していた可能性が示唆されていた。これを踏まえて本論の研究視角として、港湾都市の都市空間において、港湾における諸機能の空間構成を把握し、都市空間と港湾の関係の変化を検証するという方法を提示した。

この視角の下で上記の2点の問題に迫るため、次の課題①～③を設定した。すなわち課題①は、港湾の諸機能の空間構成の検証により、近世における港湾のゾーニングの有無やその内容を示すことである。課題②は近世の人工的な港湾の整備に関連して、町場がいかに変化したのを検証し、港湾と町場の関係に迫ることである。課題③は、港湾・町場の変化を、流通経済やそれに関連した政治、社会などの変化に位置付け、空間構造の変化の要因・背景に迫ることである。

第2章では、中世鹿児島について島津氏による港の利用と城下町形成を復原した。これは課題①②を検証する前提として、中世の港湾と町場の関係を確認するものである。その結果、島津氏は城下町形成の過程で、既存の港町を城下の町場に取り込むことで城下町の港を設けていたことが示された。他方で島津氏は繰り返し新たな対外交易港を設置しており、このような港湾の変化は、城下町形成と時期的に連動しておらず、空間的にも町場の範囲を外れて展開していた。このことから対外交易港は、地域の流通拠点に立地することは重要ではなく、船着きに適した地形条件が優先された配置になっていたと解された。人

工的な港湾開発が難しかった中世には、港湾と町場のそれぞれが異なる文脈で展開していたことが確認できた。

第 3 章は、近世の尾道を対象に港湾・町場の変遷プロセスを復原して課題①②を検証し、さらに課題③について港湾・町場の変化のプロセスと流通経済の展開の関係を、港湾都市の中核的商業の展開を通して考察した。近世前期・中期の尾道は、複数の港が町場の拡大によって緩やかに繋がった都市であり、港湾は機能分化が不徹底な中世の空間構造を引き継いで発達を続けていた。しかし、18 世紀半ばの間屋商業の停滞を画期に埋立地開発が盛んに行われた結果、間屋商業の窓口となる港を中心に、港湾全体が廻船交通への対応を軸として機能分化した空間構造へと再編成されていた。この時に埋立地に諸機能が集約的に配されたことで、町場が汀線から離れることになった。また港湾の中心地区である間屋商業の港でも、港に面した町場の内部で分化が生じていたことが窺えた。このように、近世港町では中核的商業の盛衰と連動して港湾の開発が生じ、その結果、諸機能のゾーニングが成立していたことが確認できた。また、港湾の再編と連動して町場にも変化が生じていたことを明らかにした。

第 4 章は、近世前期の瀬戸内海沿岸の港町について、幕藩権力の外港整備による港湾と町場の変化に注目した。近世前期は幕藩制的市場構造の確立期であり、諸藩が領主米の輸送のために自領の港町を整備していた。本章は、複数の港町について比較考察し、幕藩権力の港湾整備の空間的法則性を見出すものである。つまり、課題③について近世前期の幕藩権力による流通経済への関与の一環として外港整備に注目し、幕藩権力の港湾整備に通底するゾーニングとその意図に迫ることで、課題①について政治権力の視点から接近したものである。その結果、幕藩権力の整備により、港湾は一般商用港と領主用の港に明確に機能分化した空間になっていたことが分かった。また事例によっては領主米の保管・積出機能を担う御蔵所の周辺に町場が整備され、労働力の確保が意図されていたことも窺えた。つまり、幕藩権力は一般商品の流通とは区別して領主米を輸送する必要があった一方で、領主米輸送を円滑に行うには既存の港町を利用することは避けられなかったと理解できる。そのため幕藩権力は、御蔵所を既存の港町に近接させながら、港湾を空間的に機能分化させることで領主米輸送を管理していたと結論付けた。

第 5 章では、九頭竜川河口に位置する三国湊に関して、中世末から近世前期の景観変化を復原し、幕藩権力による港湾整備の実態を把握した。課題①について政治権力の視点から接近する点では第 4 章と共通する。ただし、本章では大河川河口という地形の特徴として、堆積作用による地形の変化に加え、後背地や河口部における所領関係などを視野に入れて景観復原を行うものである。つまり課題③について、藩領における流通拠点としての港町の側面を、周辺地域の状況を踏まえて考察し、幕藩権力の港湾整備を地域の文脈の中に位置付けるものである。その結果、福井藩は、地形の変化の影響で衰退していた旧来の港を領主米輸送の拠点港として再開発し、一方で町場の下流側の未開発地に港と町場を新設して廻船との商品取引に対応する商業地として振興していたことが分かった。このよう

に福井藩は水際線全体の港湾機能を再編し、港町の維持・発達を図っていた。そして藩による積極的な開発の背景には、河口部において藩領が分立しており、複数の藩の外港都市の間で競争が生じていたことが挙げられた。

終章においては、本論文の成果を整理し、残された課題を示した。

本論文の成果としては次の3点に整理できる。

第1に、中近世の港湾都市について、その形成・変化の中で、港湾の変化を位置付ける事例研究が得られたことである。中世の港湾は地形条件に即して展開し、必ずしも都市形成と対応していたわけではなかった。しかし近世には既存の港町に諸機能が集中するようになり、港湾において諸機能のゾーニングが生じていたことが確認できた。近世には、地形の変化などにより既存の港町の立地条件に多少の問題が生じたとしても、人工的な開発によって港湾を維持・発達させていたと言える。そして港湾のゾーニングの進行と連動して、既存の町場が主要な商業港から空間的に離れていたことが確認でき、機能的な面でも港湾から分化していた可能性が窺えた。

第2に、港町への諸機能の集中とそれに伴う港湾のゾーニングには多様なプロセスが見られた。そしてこのプロセスは、流通経済および政治、社会などが複合する地域の文脈を背景として生じていたと言える。

第3に、近世の政治権力の視点から、港湾のゾーニングについて、その空間的な意味の一端を解明したことである。すなわち、近世前期の政治権力が円滑な領主米輸送とその厳格な管理を求めており、その論理の下で港湾がゾーニングされていたということである。これは、歴史地理学による前近代の港湾研究に対しても、時代的な特性の中で成立する「港の論理」を見出していける視点を提示できたと言える。

本研究の残された課題としては、まず港湾への諸機能の集中や港湾のゾーニングが成立したメカニズムを解明することである。そのためには、港湾における商人や政治権力の活動の実態を詳細に分析することや、藩領における港町の位置づけについての検証を深化することなどが必要になる。また、本研究で扱った事例は限られている。中央市場であった大坂や江戸、貿易都市の長崎、諸国の近世城下町などの検証により、本研究の成果を相対化することも求められる。